

# 志賀直哉年譜考 (十)

——明治三十九年一月から十二月まで——

生 井 知 子

明治三十九年 (一九〇六) (数え二十四歳・満二十二歳～二十三歳)

1・1(月) 直哉は、「長生」についてノートに記す。一生を長く感じるよう、活動するのがいいとの意見。ノートには、続いて、

『多情多恨』の感想、活動的な生活をするため七月からアメリカに旅行する計画、稲・プリンクラーを念頭に置いたらしい《○高慢なる美しき女あり 余は、彼を憶はざるを得ざる時あり しかれども彼の前に跪く事は如何にしてもしたくなし、彼をして跪かしめたく思ふなり、》とのメモあり。(「ノート1」補⑤P348)

直哉は、木下利玄に絵葉書を書く。(M39・1・1木下利玄宛書簡)

里見弴が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

1・8(月) 学習院で始業式。(M39・3「学習院輔仁会雑誌」68号「雑報」)

1・9(火) 直哉は、『お竹と利次郎(梗概)』執筆。最初、木下利玄と広勝をモデルにして《男らしき女と女らしき男との恋》を

書こうと考えていたが、その後、直哉は《美しき剛慢なる女》(稲・プリンクラー)と《美しき淑やかなる女》とに接し、共に愛したが、傲慢な女の前には決して跪くまいと思つた経験から、お竹と芳の助との関係を描こうと思つた。直哉をモデルとした利次郎の友人は《大津》。『フラウ・ゾルゲ』『フォマ・ゴルディエフ』のように親のことから書

くか、『湯島詣』のように逆から書くか、ゴリキキーの『マカル・チュドラ』の感化もある、『多情多恨』の筆があればいいものになるのに、などの言及あり。(未定稿14)

\*「長生」と関わるメモである未定稿15は、未定稿14のノートの紙に引き続き書かれている。同じ頃に書かれたものか？

正親町公和が直哉に絵葉書を書く。葉書のお礼など。(『志賀直哉宛書簡集』)

1・11(木) 武者小路実篤が直哉に葉書を書く。吉光長一が気管支カタルで四週間の欠席届が出ている、細川護立は黄痘で欠席届が出ている、片山先生もずっと休んでいる、とのこと。(『武者小路実篤全集』)

1・12(金) 細川護立が直哉に絵葉書を書く。病気で登校できないため、一月分の旅行費の徴収を直哉に頼みたいとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

\*一年間毎月二円くらいずつお金をためて、夏に旅行をした。(座談会『志賀直哉日記をめぐって』)

1・13(土) 午前九時、志賀直道が胃癌で死去。(志賀家系図)(M39・1・14、15「東京朝日新聞」広告) 白っ兎の葬儀社が葬儀万端を引き受ける。(『祖母の為に』)

1・16(火) 志賀直道の葬儀。午前九時出棺、青山墓地で葬儀。(M39・1・14、15「東京朝日新聞」広告)

1・17(水) 正親町公和が直哉に絵葉書を書く。いつから学校に来るのか、木下利玄がこの頃病気で休んでいるかわりに、川村弘は登校するようになった、吉光長一の病気は気の毒だ、文科の人四五人だけで水曜日に神田乃武の授業があるので、何か面白いものをやつてもらいたいと協議中だ、など。(『志賀直哉宛書簡』)

1・18(木) 木下利玄が直哉に葉書を書く。病気見舞いのお礼。(『志賀直哉宛書簡集』)

1・24(水) 雪。「歴史」の時間中、直哉は川村弘に《風流韻事を解する君の此雪景色に炬燵に入つて暖を貪る愚はなさざるべし、共に江戸の街の雪見をなさずや》と教場通信を回す。川村弘は炬燵に入つて雪見酒が風流だと返事をする、直哉は

『江戸式の風流を解せざるは憐れなり、北斎の雪景色を見給はざるや』と返事をする。(『芳舟遺稿』所収川村弘日記)

1・25(木) 正親町公和が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

1・28(日) 昼近く、医者への帰りに、直哉は木下利玄を訪問。昼食後、木下利玄と昨年春の鹿野山旅行の思い出を語りつつ青山に行く。川村弘を誘い、志賀直道の墓参をして帰宅。岩倉道俱も来宅。夕方、木下利玄と田中平一を訪問。木下利玄と共に帰宅。夕食後、夜まで国立劇場・女・お化け・夢などについて語る。(木下利玄日記)

正親町公和が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。これが『即興詩人』の出だしの噴水ではなかったか、『吾輩は猫である』『新曲赫映姫』北斎三枚が届いた、とのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

2・2(金) 正親町公和が直哉に絵葉書を書く。三日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

2・3(土) 吉光長一(空華)死去の電話を川村弘(芳舟)から受け、直哉は神田の神保院に行く。(未定稿18『濠の波』)吉光も昇之助ファンの一人だった。(『興津』)

2・4(日) 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。五日の消印。『誓の巻』の批評ありがとう、昨日武者小路実篤から遊びに来いと直哉のことづてを聞いたが所用のため行けなかった、など。(『志賀直哉宛書簡集』)

2・6(火) 直哉は、有島生馬に手紙を書く。大学を出たら独立する約束を父・志賀直温としているので、どうしたらいいか、名案がなくて困っている。金持ちにならない商売人になるか、大百姓でない百姓になるか。昨今、父と親しくなり、毎日話をする。按摩をしたり、父に色々を言い付けられるようになった。川村弘が吉光長一の遺稿集を出すために奔走している。最近、北斎のよさが分かるようになった。大学は哲学科はやめ、英文科にする方が得策だと分かった。軽い中耳炎で一週間ほど学校を休んだ、など。(M39・2・6有島生馬宛書簡)

2・8(木)？木下利玄が直哉に絵葉書を書く。昇之助の子供時代を思わせるような娘を見かけたとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

2・10(土) 有島生馬が直哉にモーツアルトの肖像画の絵葉書を書く。イプセンはアメリカの有島武郎もよく読んでいるとのこと。  
 (『志賀直哉宛書簡集』)

2・11(日) 直哉は、前日見た、子供に帰り、房吉に背負われて千駄木の佐本に寄る夢、実母が実は生きていたが、義母が居る為  
 自家には帰れぬという夢を手帳 (Impressions II?) に記したらしい。(未定稿69『せめふさげ』十一)

2・13(火) 直哉は「手帳1」(Impressions III)を使い始める。ハウプトマンの“The Weavers”(織工)の、料についてのメモなど  
 あり。(新『志賀直哉全集』補⑤P3)

\*対談『小説について』によれば、河竹黙阿弥が始終帳面を持って見聞したことを書き留めていたと聞いて、その真  
 似をして、小さい帳面を懐に入れていた時代がある。

有島生馬が直哉にイプセンの肖像画の絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

2・15(木) 父・木下利永の病気のため、足守に帰省した木下利玄が直哉に葉書を書く。新橋まで機械を持って見送りに来てくれ  
 た礼。(『志賀直哉宛書簡』)

2・17(土) 木下利玄が直哉に葉書を書く。直哉の注意に従って、布団を釣り、機械で牛肉の汁を搾って飲ませたとの報告。(『志  
 賀直哉宛書簡集』)

2・?

直哉は、有島生馬に手紙を書く。山本愛子が、山本直良に(関安子の事を?)打ち明けたそうだが、学習院では、ドイツ  
 ケンズの“A Tale of Two Cities”(二都物語)の神田乃武の講義が今年に入って始まり、林博太郎のアンデルセン  
 “Bilderbuch ohne Bilder”(絵のない絵本)も始まり、服部他之助は“Stories from Virgil”(ウェルギリウス作品集)を  
 講義している、家ではハウプトマンの“The Weavers”を読み出した、イプセン研究はもう少したってからのした、  
 今の内は語学に力を集注しないと損だ、など。(M39・2?有島生馬宛書簡)

\*神田乃武の“A Tale of Two Cities”の革命の所などは、ベランメエ調で、速記しておけばいい翻訳だと思った。非

常に面白かった。(座談会『学習院時代を語る』(対談『明治の青春』)

2・19(月) 木下利玄が直哉に、父・木下利永死去との葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

2・22(木) 邦語部例会。直哉が開会の辞を述べる。大原重勇「郡司大尉」、柳沢光治「野見宿禰の仁」、服部純雄「平治物語待賢門の一節」(朗読)、志賀直哉「よろしく」、内藤政光「近江聖人」、児島喜久雄「忘れられたる輔仁」(会雑誌)、園田進「境遇の吾人に及ぼす影響」、裏松友光の飛び入り、徳川慶久「所感」、大森金五郎「片瀬游泳寄宿舎に於ける生活を憶ふ」。閉会の辞も直哉で、同級同士で討論をして欲しい、高三では今日するつもりだったが、出演者が多かったのでやめた、次回はするつもり、と述べる。(M39・3「学習院輔仁会雑誌」68号「批評」)「二月二十二日の邦語部例会評」(里見弾『君と私』五)(座談会『白樺』座談会)(「手帳1」補⑤P5)

2・23(金) 俳句・川柳が大流行中の学習院高等学科で聯珠吟が始まり、五日間に及ぶ。直哉も加わる。(新『志賀直哉全集』補④)(「手帳1」補⑤P6~7)

2・24(土) 英国コンノート殿下を招待し、東京音楽学校で英国大使夫人主催の音楽会。夜はコンノート殿下を招待し、歌舞伎座

で、「昔話日英同盟」「夜討曾我」「彫刻師の夢」を上演。(続々歌舞伎年代記) 坤の巻 (M39・2・25「読売新聞」)

直哉も、コンノート殿下の歓迎を兼ねた慈善音楽会と歌舞伎座の慈善芝居を見た。(「手帳1」補⑤P9)

この頃か? 直哉は、イブセン、ゴリキも破壊者であるとし、「破壊」という題で演説することを考える。(「手帳1」補⑤P7)

3・3(土) 直哉は、三月十三日にする演説「長生」の原稿を書く。長生とは活動的な人生を送ることであると、ゴリキを例に挙げる。(「ノート2」補⑤P352)

3・7(水) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローマの消印、麻布四月十四日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

3・8(木) 木下利玄が直哉に葉書を書く。九日の消印。二月八日に見かけた昇之助の子供時代を思わせるような娘に、また会ったとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

3・9(金) 三時半から、吉光長一の五七日の為、大久保の専福寺で法要。一部三年級主催。吉光は義太夫、殊に「芳四」「逆櫓」「堀川」が好きであったので、夜、川村弘と直哉は、一ツ木に朝重の「近頃河原達引」堀川の段を聞きに行く。(『芳舟遺稿』所収川村弘日記)

正親町公和が直哉に絵葉書を書く。十日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

3・11(日)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、東京四月四日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

3・13(火)

学習院邦語演説会。武者小路実篤「エマーソンの自信論梗概」(朗読)、清岡八郎「男らしい男」、川村弘「樗牛の生涯」、柳宗悦「平家雑感」(朗読)、柳沢保承「清見寺の鐘声」(朗読)、志賀直哉「長生」、斎藤博「輔仁会大会に就きて」。討論「田舎生活と都会生活」で、田舎派は武者小路実篤・徳川慶久・細川護立・斎藤博、都会派は志賀直哉・川村弘・正親町公和・木下利玄、裏松友光が議長。(木下利玄日記「手帳1」補⑤P8~10)(M39・6「学習院輔仁会雑誌」69号「雑報」)

この頃か?

直哉は小山内薫宛の絵葉書(未投函)にピネロのことを記す。ピネロを一冊読んでみたいと思ったが、何が傑作か分からないので、丸善に頼んで全集を取り寄せて貰ったら二十冊ほど来たので、よさそうなものを同級の四人で八冊買った。“Sweet Lavender” “The Magistrate” “The Second Mrs Tanqueray” “Dandy Dick” “The Schoolmistress” “The Cabinet Minister” など。小山内薫に『ザ・セコンド・ミセス・タンカレー』を送る。(新『志賀直哉全集』⑩P113)

\*『ザ・セコンド・ミセス・タンカレー』は、斎藤博から借りて小山内薫に貸したらしい。ピネロの“A Wife Without a Smile”(『笑わぬ妻』)を、三月十五日に小山内薫から借りたらしい。(「手帳1」補⑤P17)

\*直哉は小山内薫に勧められて、ハイネマンという本屋から出たピネロの戯曲を十冊ほど取り寄せ、小山内薫に貸した。直哉はあまり興味がなく、『ザ・セコンド・ミセス・タンカレー』というのを一つだけ読んだと回想している。

〔丸善の憶ひ出〕（座談会『志賀直哉日記をめぐって』）

この頃か？

直哉は、イエーガーの“Henrik Ibsen”、ツルゲーネフの“Rudin”（『ルージン』）、スーデルマンの“Frau Sorge”、ト  
ルストイの“Kreutzer Sonata”、“Maupassant”、ツェロロの“The Magistrate”（『判事』）“A Wife Without a Smile”、  
ハウプトマンの“The Weavers”、島崎藤村の『破戒』などの書名を手帳に記す。（「手帳1」補⑤P10～11）

3・17（土） 「漢文」の試験。（「手帳1」補⑤P10）

3・18（日） 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。本郷座の「野火」を見に行くとのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

3・20（火） 「文学史」の試験。（「手帳1」補⑤P10）

3・22（木） イプセンの顔のついた葉書が武者小路実篤の所に届く。木下利玄によると直哉のしわざ。直哉は学習院を欠席。（武  
者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）

3・23（金） 「歴史」の試験。（「手帳1」補⑤P10）（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）

3・24（土） 直哉は、『濠の波』執筆。吉光長一（空華）追悼の文章。（未定稿18）

3・26（月） 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。《せめて意志の強かつたその人にあやかると今日には久し振りに「ortoise」の親焼を  
味つた、》と記す。広勝のことか。（『志賀直哉宛書簡』）

3・27（火） 晩、武者小路実篤が志賀家に来宅。直哉は運動についての作文を見せられる。ついで正親町公和が来宅。（武者小路実  
篤『彼の青年時代』所収日記）

木下利玄が直哉に絵葉書を書く。二十八日の消印。東京座からの便りを見た、明晩一緒に銀座に行こう、など。（『志  
賀直哉宛書簡集』）

3・28（水） 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローマの消印、麻布五月十四日の消印。二月十七日の手紙を受け取った、など。  
（『志賀直哉宛書簡集』）

3・30(金) 直哉は武者小路実篤を訪問。武者小路実篤が先日書き上げたドラマの梗概を見、一緒に木下利玄を訪問。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

3・31(土) 直哉は一人で鹿野山へ旅行。(M39・4・2川村弘宛書簡)(M39・4・4有島生馬宛書簡)

4・2(月) 直哉は鹿野山で、川村弘、田中平一、武者小路実篤に葉書を書く。(M39・4・2川村弘宛書簡)(M39・4・2田中平一宛書簡)(M39・4・2武者小路実篤宛書簡)

直哉は『花ちやん』執筆。(『菜の花と小娘』草稿)(『手帳1』補⑤P11~12)

4・3(火) 直哉は黒木三次に葉書を書く。(M39・4・3黒木三次宛書簡)

4・4(水) 鹿野山に木下利玄と北島貴孝が二泊しに来る。(M39・4・5志賀家宛書簡)

直哉は有島生馬に手紙を書く。㊦の長女がリユーマチで去年亡くなった、昨日は一番大きな老杉が倒された、『破戒』は今読んでいる、など。(M39・4・4有島生馬宛書簡)『老杉』

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。病気になったこと、ハウプトマンの『日の出前』読了とのこと。(武者小路実篤全集)

4・5(木) 直哉は鹿野山で、志賀家、清水澄、武者小路実篤、里見弴に葉書を書く。ピネロは来た翌日読んだがたいしたことはない、『クロイツェル・ソナタ』は一気に読もうとしたので失敗した、などの記述あり。(M39・4・5志賀家宛書簡)

(M39・4・5清水澄宛書簡)(M39・4・5武者小路実篤宛書簡)(M39・4・5里見弴宛書簡)

川村弘が直哉に手紙を出す。長野に旅行した、鹿野山からの直哉の便りを受け取った、など。(『芳舟遺稿』所収川村弘書簡)

4・6(金) 直哉は上田操に葉書を書く。富士廻りには参加しなかったとのこと。(M39・4・6上田操宛書簡)

この頃か? 直哉は読みかけの本として、ゴーリキーの“Foma Gordyeff”“The Outcasts”トルストイの“Kreutzer Sonata”



ズーデルマンの“*The Joy of Living*”、イブセンの“*Brand*”、“*Ibsen's Life*”の書名を手帳にメモする。四月中に読み上げる予定のものは、“*Iconoclasts, a book of dramatists : Ibsen, Strindberg, Becque, Hauptmann, Sudermann, Hervieu, Gorky, Duse and d'Annunzio, Maeterlinck and Bernard Shaw*”（『偶像破壊者』）、イブセンの“*Love's Comedy*”（愛の喜劇）“*Peer Gynt*”、“*The League of Youth*”、“*Pillars of Society*”。五月中に読み上げる予定のものは、“*An Enemy of Society*”、“*The Wild Duck*”、“*Rosmersholm*”、“*The Lady from the Sea*”（海の夫人）“*Hedda Gabler*”、“*John Gabriel Borkman*”。六月中に読み上げる予定のものは、“*Little Eyolf*”、“*The Master Builder*”、“*Nora*”、“*Ghosts*”、“*When We Dead Awaken*”。〔手帳① 補⑤ P14～15〕

#### 4・7(土)

白杉義雄ら一行が、一泊しに鹿野山に来る。(M39・4・9 有島生馬宛書簡) (M39・4・9 志賀家宛書簡)  
直哉は、黒木三次、田村寛貞、武者小路実篤に葉書を書く。田村寛貞たちとの富士廻り不参加の詫びなど。(M39・4・7 黒木三次宛書簡) (M39・4・7 田村寛貞宛書簡) (M39・4・7 武者小路実篤宛書簡)  
木下利玄が直哉に葉書を書く。鹿野山から帰った時のことなど。(『志賀直哉宛書簡』)

#### 4・8(日)

直哉は、騒がしい客を人間中の畜生であると不快に思う。ピネロの“*The Magistrate*”読了。イブセンを研究しよう  
と決意し、イブセンの伝記を真面目に読み出す。〔手帳① 補⑤ P16〕  
直哉は「手帳②」(Impressions IV)を使い始める。この頃、読みかけの本は、“*Foma Gordyeff*”、“*The Outcasts*”、“*Kreutzer Sonata*”、“*The Joy of Living*”、“*ノイエルマンヌ*”の“*The Ghetto*”（『タナー』）“*ノヴァブートン*”の“*Lonely Lives*”（『寂しき人々』）。イブセン研究の予定も立てる。(新『志賀直哉全集』補⑤ P18～)  
里見弾が直哉に絵葉書を書く。鹿野山からの葉書を受け取ったなど。(『志賀直哉宛書簡』)  
有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローマの消印、麻布五月十四日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)  
木下利玄が直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

4・9(月) 直哉は鹿野山で、志賀家に、十一日の夕方帰宅予定との葉書を書く。(M 39・4・9 志賀家宛書簡) 有島生馬には手紙を書く。島崎藤村の『破戒』を読んだが、これは今までの日本の小説とは違い、ローマンスといふべきもので、ズーデルマン『フラウ・ゾルゲ』・ゴリキー『フォマ・ゴルディエフ』の体と同じ、その記事が常に主人公を離れない点、主人公が平凡人である点は大変いいが、同情できる人であるというのが主人公の最も大切な資格なのに、丑松にはそれが無い、『破戒』の結末で先まで書きすぎないところは、この間読んだハウプトマンの『織工』と同じでいい、などと批評。ピネロのもの二つ、『クロイツェル・ソナタ』を三分の一読んだ、イエーガー (Jaeger) の『イブセン伝』を読んでいるがとても面白い、などと記す。(M 39・4・9 有島生馬宛書簡)

4・10(火) 直哉は鹿野山で、丸善の加藤実造に、ビョルンソンの“Laboramus” (ラテン語、『x』あ仕事を続けよ、)、 “Plays of Maeterlinck”、カーリダーサの “Shakuntala” (『シャクンタラ』) を注文する葉書を書く。(M 39・4・10 加藤実造宛書簡) 手帳に、天皇制を否定して迫害される《覚中夢》を記し、それを『フラウ・ゾルゲ』『フォマ・ゴルディエフ』『破戒』のような体の小説にすること、発売禁止になること、迫害を受け、ゴリキーのもとで子供を育てること、長男が立派な偶像破壊者になって帰国することなどを、《覚中夢二》として記す。(手帳2) 補⑤ P 21～24) 武者小路実篤が直哉に葉書を書く。ツルゲーネフの『父と子』を乱読したなど。(『武者小路実篤全集』)

4・11(水) 学習院で始業式。(M 39・6「学習院輔仁会雑誌」69号「雑報」)

4・12(木) 直哉は、武者小路実篤に電話をし、『イブセン伝』を読みつつあると告げる。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記) 昼休み、直哉は、武者小路実篤にイブセンの幼時の話をし、旅行の相談をする。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

4・13(金) 「武課」の前の休みに、垂桜の下のテーブルをはさんで、直哉は武者小路実篤と話す。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

4・14(土) 正親町公和が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

この頃 直哉は、十九日～二十日に“Lonely Lives”、二十一日～二十二日に“The Joy of Living”、二十三日にゴネロの

“Sweet Lavender”、二十四日～五月二日の旅行中の“Pillars of Society”“An Enemy of Society”、四日に“The Ghetto”の梗概作成、五日～十日に“The Dead City”などの読書計画を立つる。(『手帳2』補⑤A29)

この頃 直哉は、手帳に、《社会劇》『水車』(↓後の未定稿23、24、39) 『脱宮』『誘惑』『お竹 利次』(↓未定稿14) 『癡夫』

『醜婦』といった作品名のメモを記す。《大津史》の名もあり。(『手帳2』補⑤P29～30)

4・23(月) 直哉は、祖父・志賀直道の百ヶ日に青山墓地で、自分は祖父すら真心から愛していなかった、まして赤の他人を愛せ

ようかと考へる。(『手帳2』補⑤P31)

4・24(火) 直哉と武者小路実篤が旅行に出発。六時発の汽車で御殿場まで行き、馬車で山中湖まで行き、徒歩で河口湖へ行く途

中の御堂で一夜を明す。用意のビスケットで夕食。寒くてたまらない。思ったほど辛くもなかったが、思ったほど面

白くもなかった。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)(M39・5・7有島生馬宛書簡)

\*この旅行は、ゴリキーを愛読していたため行った。(対談『秋の夜話』)

4・25(水) 直哉と武者小路実篤は河口湖畔にて朝食。西湖を経て、青木ヶ原に行く。雪にドロップを入れて食べる。本栖湖、精

進湖を経て女坂峠を越え、七時半、古閑泊。真つ暗で野宿は出来ないのので百姓家に泊めて貰おうと思うが断られ、木

賃宿もなかったため、宿屋に泊まるが、ノミでよく眠れない。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)(M39・5・7有

島生馬宛書簡) ↓『濁つた頭』の舞台。(『二日前に想ひついた小説の筋』)

4・26(木) 直哉と武者小路実篤は六時前出発。一つ峠を越えて、甲府を縦断。ここへ来る前、直哉は旅行に厭きて帰りがたくなる。

御嶽泊。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)(M39・5・7有島生馬宛書簡)

4・27(金) 直哉と武者小路実篤は甲州路を越えて信州入り。途中、夢で見た事のあるような、清い流れのある、広い高原を通る。

海の口から馬流までの馬車の中で、直哉は祖父・志賀直道と祖母・留女の事を考える。祖母は自分の一部だ、洋行もやめる、自分の信仰を害さない限り、祖母の為につくしたいと思う。(M39・5・7有鳥生馬宛書簡) ↓ 『或る男、其姉の死』(三十五)の高原のモデル

4・28(土) 信州南佐久郡馬流より、木下利玄に、直哉と武者小路実篤が寄せ書きの絵葉書を書く。(M39・4・27木下利玄宛書簡)

直哉と武者小路実篤は、馬車で岩村田まで行き、歩いて御代田へ行き、汽車で前橋泊。(M39・5・7有鳥生馬宛書簡) (M39・4・27木下利玄宛書簡)

4・29(日) 信州の直哉が志賀留女に絵葉書を書く。一昨日くらいから、もう帰りたくなつたなど。(M39・4・28志賀留女宛書簡)

直哉と武者小路実篤は前橋で写真撮影。赤城泊。とても寒い。(新潮日本文学アルバム 武者小路実篤) 掲載・写真 (M39・5・7有鳥生馬宛書簡) (M39・4・27木下利玄宛書簡)

\* 赤城では場合によつたら野宿でもするつもりだったが、雪が積もつていたため、猪谷旅館に泊まつた。非常に寒かつた。(座談会『焚火』のころ)

4・30(月) 直哉と武者小路実篤は帰京。直哉は、この旅行は気が楽ではなかつた、武者小路実篤は真面目な男だが、長くつきあつてゐるのではないから、自分を抑えてしまふと思う。(M39・5・7有鳥生馬宛書簡) (M39・4・27木下利玄宛書簡)

帰宅後、直哉は、四月二十七日に馬車の中で考えたことを手帳に記す。《僕はイブセンやハウプトマンを読むで自分に忠実ならん事を志し》《自己の為めにお婆さんを犠牲にして少しも差支えないものと考えてゐた》が、《お婆さん程すきな人はない》、《自分が若しも妻を迎へる時があつたら自分と一つの個人となる事の出来る人をもりたい》が、自分は《今の所、世界中で唯一人お婆さんとのみ》一つの個人となる。今日、末永馨から渡米に関する注意が届いたが、志賀留女の為に洋行を断念しよう、とのこと。(手帳2) 補⑤ P32~35 (M39・5・7有鳥生馬宛書簡) (M39・5・

22末永馨宛書簡)

5・1(火) 直哉は木下利玄に絵葉書を書く。芝居について。(M 39・5・1木下利玄宛書簡)

5・2(水) 木下利玄が直哉に葉書を書く。芝居について。(『志賀直哉宛書簡集』)

この頃か。直哉は、手帳に《1 Little Eyolf / 2 The Master Builder / 3 Nora / 5 Ghosts / 6 When We Dead Awaken / 7 Weavers / 8 A Wife Without a Smile / 9 Magistrate / 10 Ghetto / 11 Lonely Lives / 4 Frau Sorge》と記す。これまで読了した順に列挙した洋書リストか。(『手帳2』補⑤P 36)

5・5(土) 学習院で、石橋教授在職二十五年祝賀会。(『方舟遺稿』所収川村弘日記)「石橋先生就職二十五年祝賀醸金決算報告」に五十銭として志賀直哉の名前あり。(M 39・6「学習院輔仁会雑誌」69号「付録」)

直哉は、高等商業学校の英語会を見る。「リップ・バン・ウインクル」「ウイリアム・テル」「ハムレット」等の芝居あり。(『手帳7』補⑤P 171)(M 39・5・7有島生馬宛書簡)『大津順吉』(第一一三)によれば、稲・プリンクリーに会ったらしい。

5・6(日) 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。七日の消印。柳は「リップ・バン・ウインクル」が大変面白かったと言っていたが、くだらなかつたのか、など。(『志賀直哉宛書簡集』)

直哉は、「ヘブライ書」第十二章について、善をなすが為に世から悪まれるようにならなければ天国は見えないと手帳に記す。続いて、ハウプトマン、ズーデルマン、ニーチェの生涯と作品について記す。欲しい本のリストの中に、ドストエフスキーの“Sin and Punishment”(正しくは“Crime and Punishment”『罪と罰』)の書名あり。(『手帳2』補⑤P 36~39)

\*『白樺』座談会』によると、直哉は『罪と罰』の英訳を買おうと思つて、丸善の田中という人に“Sin and Punishment”と言つたら、“Crime and Punishment”と直された。

5・7(月) 直哉は有島生馬に手紙を出す。武者小路実篤との旅行のこと。『破戒』のこと。ドストエフスキーの『罪と罰』の英

訳を探している。『破戒』のすぐ後にハイエルマンズの“The Ghetto”という脚本を読んだ、梗概を作って送ろうと思ったがやめた。三月十九日の有島生馬の手紙と『即興詩人』の泉の絵葉書が届いた、有島生馬が今を楽しむことを書いていたが、モーパッサンの『過去の残り物』というのに「幸福とは幸福なる予期なり」とあった。イブセンは五冊しか読んでいない、イブセンの感化を受けたと言われるハウプトマンやビネロを少し読んでいる、イブセンは真面目に研究したいと思つて参考書を集めている。学習院の英語は、テニソンの詩、エマーソンの『自然論』、デイッケンズの『二都物語』、『マクベス』をやっている。関安子を近日田村寛貞に紹介しようと思つた。正親町公和が『甲府行』という長編を作つた、など。(M39・5・7有島生馬宛書簡)

5・12(土)

直哉は正親町公和を訪問、武者小路実篤もやつて来る。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

田中平一がアメリカへ出発。ニューヨークへ行く。(M39・5・7有島生馬宛書簡)

5・13(日)

内村鑑三が、姦淫を大いなる罪だと言ひ出したのは、キリスト教がはじめだと説教するが、直哉は姦淫罪について疑問を持つ。若き初恋の男女が姦淫だとして迫害されるのを書くことを考える。(手帳2)補⑤P45~46(M39・6・10「聖書之研究」によれば、五月二十日の講演は「ユダの叛逆」、二十七日は「キリストの表白」だった。)↓『濁つた頭』(このモデル直哉は、小杉天外を『蛇いちご』以来読んだことはないが、日本に起こつた自然主義の一つとして『初姿』を読んてみようと思う。(手帳2)補⑤P41)

有島生馬が直哉に手紙を書く。(志賀直哉宛書簡)

5・14(月)

直哉は、『手帳3』(Impressions V)を使い始める。横浜で探す本として、ドストエフスキー、ゴーゴリ、ゾラ、ドレーデなどの名前を記す。(新『志賀直哉全集』補⑤P49)

清水澄の「憲法」で『緊急勅令ヲ廃止スルニ法律又は緊急勅令ヲ以テセザルベカラザルヤ』との論文の宿題が出る。二十一日まで。(手帳2)補⑤P42(『芳舟遺稿』所収川村弘日記)(『山荘雑話』「清水澄先生」)

5・15(火) 学習院一部三年級の学生たちが写真撮影。(『新潮日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・写真)

里見弾が直哉に絵葉書を書く。十六日の消印。ゴースリキーが第二夫人と日本に来るそうだとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

5・18(金) 直哉が、正親町公和の家から川村弘と話して帰った際、川村は自分たちは作家にはなれないと言いが、直哉はそんなことはないと言った。(『手帳2』補⑤P44)

5・19(土) 直哉は、『明らかに傾向を持った作家になつて見せる、主張のある、独特な体の作家になつて見せる、』と手帳に記す。(『手帳2』補⑤P44)

里見弾が直哉に絵葉書を書く。“The Three Homes”はDean Farrarという人だったとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)  
里見弾が直哉に絵葉書を書く。波野辰次郎(中村吉右衛門)が乙種合格となったとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

5・20(日) 午後、直哉は川村弘を訪問。四時に帰る。(『方舟遺稿』所収川村弘日記)

5・21(月) 有島家で殿太夫を招いたので、直哉も有島家を訪問、山本一家に会う。愛子はイブセン『わたしたち死んだ者が目覚めたとき』のモデルになった女のような気がする、長男は気の毒だが、子供たちは後程美しく可愛らしいような気がすると思う。(M39・5・27有島生馬宛書簡) ↓『不具の子』のモデル

武者小路実篤が、直哉から借りた『多情多恨』を読み始める。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

5・22(火) 直哉は、南カリフォルニアの末永馨に手紙を書く。祖母・志賀留女の為に渡米は断念すること。(M39・5・22末永馨宛書簡)

直哉は、『不具の子』を構想。(『手帳3』補⑤P51～53) ↓後の未定稿25『愛子と徳田 梗概』

5・24(木) 邦語部の例会で演説した帰り、武者小路実篤が志賀家に来宅。十一時まで直哉と雑談。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

里見弾が直哉に絵葉書を書く。長く借りていた本(『破戒』)を明日返すとのこと。二十五日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

5・25(金)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。二、三日前に鹿野山からの手紙が届いたとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

5・26(土)

直哉は、立花亭で昇之助の「御所桜堀川夜討」弁慶上使の段を聞く。(『手帳3』補⑤P54)

直哉は横浜に行く。西洋人の運動会を見る。ゾラの『居酒屋』『人間の獣性』、ドストエフスキの『罪と罰』、メレジコフスキの『先駆者』、ドーデの『サッフォー』、マックス・ノルダウの『パレードックス』『慣例的虚偽』『巴里のスケッチ』、ニーチェの『ワグネルを悪くいふた論文』を買った。(M39・5・27有島生馬宛書簡)

5・27(日)

直哉は、有島生馬に手紙を書く。白馬会の機関誌「光風」で、ホイッスラーやミレーのことを非常に面白く読んで、ミレー、ホイッスラーは、『世の風潮に逆らつた人達』ではあり、其迫害やら何やらが恰も思想家のそのやうで、誠に痛切に感じた、彼等は猶且思想家である、英雄である、(中略)今の日本の美術家は(中略)何の傾向もなし、理想もなし』と述べる。自分に感化を与えた人として、祖母・志賀留女、高崎弓彦、内村鑑三、岩元禎、有島生馬を挙げ。傾向を明らかにした主張のある独創の作家になる決意を表明し、この頃やつとその決心がついたと言う。芸術の山の頂きを目指そうとしない川村弘や木下利玄とは道連れになれない、田村寛貞の議論は不真面目だ、今、自分と真面目に話してくれるのは、武者小路実篤だが、趣味の広さに甚だ相違がある、今日、関安子を田村寛貞に紹介しようと思っていたが、山本愛子が国府津から来たので来られなかった、先週の月曜日、有島家で山本愛子夫妻に会った、安子是有島家の手伝いをしていて元気だった、などと記す。(M39・5・27有島生馬宛書簡)(『手帳3』補⑤P54)

5・28(月)

木下利玄が直哉に葉書を書く。二十七日初日の歌舞伎座(「南都炎上」「勸進帳」「助六由縁江戸桜」、『続々歌舞伎年代記』坤の巻)を観た報告。(『志賀直哉宛書簡集』)



6・2(土) 直哉は、歌舞伎座見物。(「手帳3」補⑤P57)

6・3(日) 直哉は、内村鑑三の話を聞いて、内容を手帳に記す。(「手帳3」補⑤P58～59)

6・5(火) 里見弴が直哉に歌舞伎の自筆絵葉書を出す。六日の消印。はしかのやり直して寝ている、歌舞伎の批評を聞きたいとのこと。(「志賀直哉宛書簡集」)

6・6(水) 里見弴が、退屈なので胸のすくような日本語の小説を教えて欲しいと、直哉に絵葉書を出す。八日の消印。(「志賀直哉宛書簡集」)

\*里見弴『君と私』(十二)によれば、麻疹の回復期にある里見弴に面白い本を教えてくれと頼まれた直哉は、ニイチェ、斎藤緑雨『あま蛙』、式亭三馬の『浮世風呂』、『平家物語』を勧めた。

この頃か? 直哉は「手帳3」に《自分はどうしても独創的な文体を初めたい、日本の文学をキメたい、支那及び西洋の感化を、

文章の上に於ては、脱したい》《智は吾人を益々コセツカセ、(中略)大なる人格は、自由である、》と記す。(「手帳

3」補⑤P63～64)

6・9(土) 武者小路実篤が大学の三年間で二問題を全力を尽くして研究することを決心したと、直哉に話す。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

6・10(日) 直哉は、内村鑑三の話を聞いて、内容を手帳に記す。(「手帳3」補⑤P65～66)

午前、武者小路実篤を訪問。偽善・忠君愛国・婦人などについて話す。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)  
六、七歳頃の直哉と唯一の遊び相手だった同年のお清さんが亡くなる。(「手帳3」補⑤P68～69)

6・11(月) 正親町公和が直哉に絵葉書を書く。十二日の消印。遺稿集のこと。(「志賀直哉宛書簡集」)

6・12(火) 稲・プリンクリーから直哉に、十五日(金)のダンスの誘いの電話がある。高崎弓彦に行ってもいいと言ったではないか、男が足りないから来てくれと言われるが、直哉は病気で沼津にいる正親町公和の所へ金曜日から遊びに行こう

と思つていた事を口実に断る。(「手帳3」補⑤P69、71)(草稿『第三篇』四)(『大津順吉』第一一三)

\*「手帳3」・草稿『第三篇』・『大津順吉』から考えると、この頃、高崎弓彦と稲・プリンクラーは恋愛中だったが、間もなく弓彦は別の娘と結婚して渡米し、稲はヒステリーになった。

夜、直哉と川村弘は、小川亭で東猿の「絵本太功記」十段目を聞く。(『方舟遺稿』所収M39・6・13正親町公和宛川村弘書簡)

6・15(金) 直哉は、「学習院輔仁会雑誌」第六十九号「詞苑」欄に「某」の署名で『老杉』、一部三年級による「お別れの記」に「半」の署名でコメントを発表。(新『志賀直哉全集』⑩)

翌日の午前にかけて、鏡花の新作『無憂樹』を読む。(「手帳3」補⑤P71)

6・21(木) 里見弾が直哉に絵葉書を書く。長座した礼。(『志賀直哉宛書簡集』)

6・22(金) 直哉は、独旅について手帳 (Impressions VI?) に記す。(未定稿69『せめふさげ』十四)

6・26(火) 直哉は、『脚本 悪魔凱歌』<sup>あくまのかちどろ</sup>を執筆。(未定稿19)

6・27(水) 里見弾が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

6・28(木) 学習院の授業終了。直哉は、田村寛貞・黒木三次と東京病院に行き、田村に関安子を紹介した。山本愛子は元気そうで、直哉は、関安子が山本愛子のような人になる事を希望する。里見弾も来ていて、帰りに、田村と里見弾が志賀家に来る。直哉は、善の為の手段としては殺人も差し支えないという田村と大議論をする。(M39・7・11有島生馬宛書簡)

6・29(金) 川村弘、田村寛貞、黒木三次、松平春光、直哉などで三河屋で会合。帰りに柳谷午郎の家に行き、二次会。(M39・7・11有島生馬宛書簡)

6・30(土) 直哉は、同級に加藤泰吉、木下利玄、北島貴孝、斎藤博、三島弥吉、黒田長敬、裏松友光、徳川慶久の九人で北越旅

行へ出発。若松の白虎隊の墓から城跡を望む。(M39・7・11有島生馬宛書簡)

7・2(月) 直哉ら一行は、坂下から津川へ。(M39・7・11有島生馬宛書簡)

7・3(火) 直哉ら一行は、阿賀野川の川下り。夕方、新潟着。(M39・7・11有島生馬宛書簡)

7・4(水) 直哉ら一行は、佐渡へ。佐渡では順徳院の御陵や金山を見学。(M39・7・11有島生馬宛書簡) (『新潮日本文学アルバム』  
志賀直哉』掲載・写真)

7・5(木) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。カッシーノ六日、麻布八月八日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・6(金) 直哉ら一行は、佐渡発。新潟を経て長岡へ。斎藤博の親類(反町茂雄の父、座談会『志賀直哉日記をめぐって』)の家に  
行つて歓待を受ける。(M39・7・11有島生馬宛書簡) (『新潮日本文学アルバム』志賀直哉』掲載・写真)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。カッシーノの消印。麻布八月八日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・7(土) 石油を掘るところを見に行つた後、斎藤博の親類が茶屋で芸者を呼んで一行を接待。直哉は、斎藤に芸者を帰して呉  
れと言う。(M39・7・11有島生馬宛書簡)

7・8(日) 朝、直哉ら一行、長岡発。夜十二時頃帰宅。直哉は、この旅行は、前半は非常に愉快だったが、後半は贅沢はしたも  
のの不快な事が多かった、將軍家のお供はこりごりだと思ふ。(M39・7・11有島生馬宛書簡)

帰りの汽車で北信濃を通過中、木下利玄宛に記念の寄せ書きの絵葉書を書く。(M39・7・8木下利玄宛寄せ書き書簡)

武者小路実篤・正親町公和が、直哉に寄せ書きの葉書を書く。(『武者小路実篤全集』)

7・10(火) 直哉は小山内薫から招待され、木下利玄・三島弥吉・里見弴などと、真砂座へ『破戒』の芝居を見に行くつもりだっ  
たが、夜中に嘔吐・下痢をし、一緒には行けなかった。(M39・7・11有島生馬宛書簡)

7・11(水) 直哉は、有島生馬に手紙を出す。北越旅行の事や鳥崎藤村『水彩画家』・小杉天外『魔風恋風』を読んだことなど。  
(M39・7・11有島生馬宛書簡)

\*座談会『志賀直哉日記をめぐる』では、旅行のことを有島生馬に書いて送ったら大いに面白がつて向うの日本人に見せた、その人が直哉の文章をほめると有島生馬はこの男は文章なんぞ書ける男ではないと言った、とある。

7・12(木)

直哉は、学習院高等学科を卒業。(新潮日本文学アルバム 志賀直哉)掲載・卒業証書)

八時五十分頃から学習院卒業式。斎藤博が銀時計を拝領。斎藤博・北尾富烈・木下利玄が褒状。夕方、宝亭で高二主催の送別会。(芳舟遺稿)所収川村弘日記)

直哉の卒業成績は、武課のみ甲、他は総て乙、品行は中、欠席日数五十一日で、第一部二十二名中十六位。一位・斎藤博、二位・木下利玄、三位・細川護立。正親町公和は十四位、武者小路実篤は十八位。(新潮日本文学アルバム 武者小路実篤)掲載・成績表)

\*学習院高等学科の卒業生は、東京・京都帝国大学の各分科大学へ高等学校大学予科卒業生を入学させた後、なお欠員がある場合は、無試験で入学できた。(学習院百年史)第一編)

7・14(土)

里見弴が直哉に絵葉書を書く。十五日の消印。(志賀直哉宛書簡集)

7・16(月)

午前、直哉は、川村弘に電話して真砂座に『破戒』を見に行こうと誘ったが、川村弘は胃腸の具合が悪く断った。

(芳舟遺稿)所収川村弘日記)

直哉は、一人で小山内薫脚色の『破戒』と「博多小女郎浪枕」、喜劇「放心家」の芝居を見る。井上正夫の丑松、伊井蓉峰の銀之助。(M39・7・24有島生馬宛書簡)(牛の角)(続々歌舞伎年代記)坤の巻)

7・17(火)

昼から武者小路実篤が志賀家に来宅。岩下家一からの葉書二枚と有島生馬からの六月七日付けの手紙が直哉に届く。

(M39・7・24有島生馬宛書簡)

この頃か?

武者小路実篤は、長屋に住んでいるまきという少女と若様との恋を描いた最初の小説を、母・武者小路秋子に見せた後、直哉に見せた。(武者小路実篤『或る男』九十五)

7・18(水) 直哉は、木下利玄、三島弥吉と市村座で観劇。「音菊天竺徳兵衛」「奥州安達原」「与話情浮名横櫛」「母育谷間鷺」。

菊五郎、吉右衛門、羽左衛門、梅幸、松助など。その後、小川亭で昇之助の「菅原伝授手習鑑」四段目を聞く。昇之助を聞くのは二ヶ月ぶり。(M39・7・24有鳥生馬宛書簡) (『続々歌舞伎年代記』坤の巻)

夜、直哉は寄席で川村弘に、空華の遺稿集の表紙を頼まれる。(『芳舟遺稿』所収M39・7・19川村弘日記)

7・19(木) 金田から武者小路実篤が直哉に葉書を書く。桑木殿翼の『哲学概論』などを買ったとのこと。(『武者小路実篤全集』)

この頃か? 二長町(市村座)で「天竺徳兵衛」を観劇した里見淳が直哉に絵葉書を書く。二十日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

\*明治三十八年のものと推定されているが、存疑。

7・20(金) 川村弘が直哉に『空華』の表紙に関する手紙を出す。明晩でも散歩旁々三秀舎に相談に行つて欲しいとのこと。(『芳舟遺稿』所収川村弘書簡)

7・21(土) 有鳥生馬が直哉に絵葉書を書く。カッシーノの消印、麻布八月二十四日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・22(日) 金田の武者小路実篤が直哉に葉書を書く。直哉が、武者小路実篤の忠孝とまきを描いた小説を褒め、発表するようにと言つたことに対する返事。(『武者小路実篤全集』)

7・23(月) 直哉は、英語を翻訳。斎藤博と一緒に語学の勉強をしていたか? (未定稿20)

\*未定稿21は続き。

\*『中野好夫君にした話』によれば、誰も知らぬ作家を選ぶというので、英訳で、ダンチェンコの炭鉱の話を書いた話を斎藤博と訳してみた。後に佐渡へ行つた時、坑道に入つて、その話に書いてあつたような光景にぶつかつて想い出したという。

7・24(火) 直哉は、有鳥生馬に手紙を書く。『破戒』のこと、市村座のこと、昇之助のこと、語学の勉強のためにロシアのダンチェンコの小説を訳していることなど。(M39・7・24有鳥生馬宛書簡)

夏の初め  
片瀬の水泳に行った木下利玄が、直哉に寄せ書きの自筆絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)  
直哉は、植物の先生、黒木三次、里見弴、柳宗悦、柳沢保承らと塩原から日光へ旅行。(里見弴『君と私』十二)

\*『廿代一面』にも、明治四十五年の《五六年前の夏》、里見弴ら十人ほどと日光から湯本へ行き、白根山に登ったことがあるとの記述あり。

7・30(月)  
桜島から川村弘が直哉に葉書を出す。(『芳舟遺稿』所収川村弘日記)

8?  
直哉は、大学の制服(十八円)と外套(二十円)を銀座の高級な洋服屋(三澤、志賀直三『阿呆伝』)に頼み、志賀直温に

贅沢だ、断れと怒られて激しい口論になる。父は、妹たちには一月程前にその洋服屋で夏服を作ってやったのに、直哉には贅沢だと禁じた。直哉は、父に腕力を振るいそうになり、もう総ては終わったと孤独を感じる。(『暗夜行路』草稿2・3)(『暗夜行路』草稿13・18)

8・2(木)  
軽井沢の武者小路実篤が直哉に手紙を書く。汽車の中で、小山内薫『青泊君』・桑木厳翼『ニーチェ氏倫理説一班』

の学説の概要を読んだ、少し前、広津柳浪『今戸心中』を読んだ、イブセン『ブランド』も読んでいる、など。(『武者小路実篤全集』)

8・3(金)  
桜島の川村弘が東京の直哉に手紙を出す。(『芳舟遺稿』所収川村弘書簡)

8・4(土)  
吉光長一の遺稿集『空華』が、学習院一部三年級によって刊行される。(『空華』)

8・5(日)  
直哉は「手帳4」(Impressions Ⅲ)を使い始める。万八の「傾城阿波の鳴門」八段目、竹本相玉の「絵本太功記」十段目、鶴沢璃幸の「契情曾我廓亀鑑」(小磯ヶ原)を聞いて考えたことを記す。竹本相玉の《太十の光秀を聞いて》直哉は、《イブセンのブランド或、ジョン ガブリエル、ボークマンはこんな男ではあるまいか(中略) 彼は当時の道徳に反抗した(遂に敗れはしたが) 偉人である、(中略) 自己を侵害した春長から独立せんとしたのである》と高く評価する。(新『志賀直哉全集』補⑤P73)

8・6(月) 日光の南薫造が直哉に自作版画絵葉書を書く。七日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・7(火)〜9(木)

直哉は『(きさ)子と真三』執筆。いわゆる姦淫について疑問を呈す。(未定稿22)

この頃 直哉はゴリーキーに出てくる強い自由な男に惹き付けられ、ゴリーキーを少しずつ読む。(草稿『第三篇』三)

8・11(土) 直哉は、はじめて川開きを見、打ち上げ花火についての感想を小山内薫への絵葉書に書く。(手帳4)補⑤P78 (M

39・8・11小山内薫宛書簡)(M39・8・12「読売新聞」)

この頃 直哉は、手帳に『万壺塔』という作品名を記す。(手帳4)補⑤P79

8・12(日) 金田の武者小路実篤が、直哉宛ての葉書に小説の筋書きを記す。(『武者小路実篤全集』)

8・14(火) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。リヴィソンドリの消印、麻布九月十七日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・15(水) 志賀直温は、衝突から二週間ほどして、直哉を誘い、二人で東北旅行をした。(M39・9・5有島生馬宛書簡)(『暗夜行

路』草稿2三)(『暗夜行路』草稿13十八)

上野発の夕方の汽車で出発。ただし、志賀直温は上等車、直哉は中等車で出発。(『山形』)

\*総武鉄道の清算で志賀直温は三万円を貰い(\*存疑)、古河の技師・木村長七に頼んで熊沢銅山を買い、直哉と見に

行った。(『祖父』十六)(座談会『志賀直哉日記をめぐって』)

8・16(木) 直哉は、仙台北一番丁に住む祖父の妹・佐藤うのを訪問する。(『山形』)(手帳4)補⑤P90

8・17(金) 直哉は、木下利玄に松島から絵葉書を出す。(M39・8・17木下利玄宛書簡)

8・19(日) 直哉と志賀直温は鳴子泊。(M39・8・22志賀浩宛書簡)

鳴子温泉に泊った夜、志賀直温は、鉱山の話から、志賀家と古河の関係について語り、足尾銅山の権利を古河に譲った時に古河から贈られた千円が志賀家の財産の基礎になったと言う。(『祖父』十六)(『山形』)直哉が子供の頃、我が

俣で少しも志賀銀の言う事を聞かず、銀はよく泣いてそれを訴えたという話もする。(『続創作余談』)『身辺のこと』「意地悪」)

8・20(月) 早朝より、直哉と志賀直温は、佐藤の案内で、鬼首吹上温泉に行く。午後三時出発して、寒風沢温泉、矢楯鉦山を廻り、鳴子に帰着。矢楯鉦山は、以前買った鉦山だが、あまり有望ではない。(M39・8・22志賀浩宛書簡)〔山形〕

8・21(火) 早朝、直哉と志賀直温は、鈴木、佐藤、譲渡人の村田、坑夫・富次ら(高橋富次、「手帳4」補⑤P79)と、今度一万円程で権利を買うことにした熊沢鉦山に赴く。番小屋に泊まる。沢で清水を浴びる。(山形)(M39・8・22志賀浩宛書簡)↓未定稿35『小説 苔の床』、36のモデル

8・22(水) 朝七時半に熊沢鉦山発、十時半に鳴子着、午後に直哉は志賀浩に手紙を書く。(M39・8・22志賀浩宛書簡)

8・23(木) 直哉は、志賀直温と別れ、鳴子から山形に赴く。三泊して帰京の予定。(山形)(M39・8・22志賀浩宛書簡)

8・24(金) 直哉は、志賀直方の師・三浦了覚と話す。三浦了覚は盲目の禅僧で、社会主義を警戒し、直哉に、大学の勉強に専念し親に安心をかけろと言うが、直哉は納得せず。(山形)(M39・9・5有島生馬宛書簡)〔暗夜行路』草稿13十八)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ソンドリオの消印、麻布九月二十九日の消印。二、三日前に越後旅行の手紙が届いたとのこと。(志賀直哉宛書簡集)

木下利玄が直哉に葉書を書く。(志賀直哉宛書簡集)

8・25(土) 直哉と志賀直方は三浦了覚の寺に行き、宿泊。(山形)〔暗夜行路』草稿13十八)

8・26(日) 寺から山形への帰途、川魚料理屋で、直哉は、志賀直方に、下らない問題で志賀直温と衝突するような事はよせ、少なくとも皇室の事などかれこれ言うなと諭されるが、逆らい、コップを投げ付けられる。予定を早め、晩の汽車で帰る。(山形)〔暗夜行路』草稿13十八)

\*直哉が行った寺は、山形在白岩洞興寺で、帰りに寄った川魚料理は丸万。(S2・3・25「読売新聞」掲載「閑談」)



8・27(月) 直哉は、帰京。(M39・8・22志賀浩宛書簡)(M39・9・5有島生馬宛書簡)

8・29(水) 木下利玄が直哉に手紙を書く。二十五日の晩から柏木に引越した、たぶん英文科にするつもり、二、三日前、広勝

を見たが、壮士のようなものが来て金を持っていったりするし、本人も朝からどこかへ飛び出すし、家でも迷惑している、広勝は邪道に陥った、など。(『志賀直哉宛書簡』)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ナポリの消印、麻布十月八日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・30(木) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ナポリの消印、麻布十月八日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・31(金) 木下利玄、正親町公和、武者小路実篤が志賀家に来宅。正親町公和の新作『浮き雲』、武者小路実篤の新作の筋を聞

き、直哉は当世の東洋流の所謂道德家を暗に罵った小説『社会の罪』(木下利玄が仮につけた題で、未定稿22『きさ子と真三』のこと)を読む。(木下利玄日記)

9 東京帝国大学文科大学に入学。……(『志賀直哉宛書簡集』)

直哉・正親町公和・木下利玄・川村弘は文学科、武者小路実篤は哲学科に入学。(『東京帝国大学一覽 明治三十九年〜四十年』)

9・2(日) 向島で、木下利玄が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

9・3(月) 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。源之助の「夏祭女団七」がよかったとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

9・4(火) 直哉は、木下利玄の淀橋の自宅に十六夜の月を見に行き、広勝がこの春墮胎をして声を潰したと聞く。(M39・9・5有島生馬宛書簡)↓『暗夜行路』(第二十一)のモデル

鹿兒島の川村弘が、東京の直哉に手紙を出す。(『芳舟遺稿』所収川村弘書簡)

9・5(水) 直哉は、有島生馬宛の手紙に、志賀直温との旅行の結果、『十年來嘗つてなかつたやうな親しみを』父に持ち、『僕にとつて今度の旅行は面白いといふより寧ろ嬉しい旅行だつた。』と記す。昇之助は美の神髓でもあるかのように、

頭の中に存在しており、鹿野山の娘にもその無形の力が働いていること、広勝がとうとう倒れて止んだこと、広勝の陥った罪を生んだものを究め、それを攻めるのが文学者として立つ自分の仕事だ、関安子は今円通寺にいる、本の世話くらいしか出来ない、安子の事は、万事山本愛子に任せ、何か自分の力を要するような場合に出来るだけの事をしようと思っっている、安子には山本愛子のような人になって欲しい、などと書き送る。(M39・9・5有島生馬宛書簡)

直哉は、志賀留女から志賀直温が《彼奴の爲めにはもうどんな事があつても涙はこぼれない》と言っていたという事を聞き、淋しい気がする。(『暗夜行路』草稿2三)(『和解』三)

9・7(金) 正親町公和が直哉に自筆絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

9・8(土) 里見弾が直哉に自筆絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

9・11(火) 東京帝国大学で第一期開始。(『東京帝国大学一覽 明治三十九年～四十年』)

柳宗悦が直哉に手紙を書く。ギリシア・ローマ神話の英語の本を教えて欲しいとのこと。(『志賀直哉宛書簡』)

この頃か?

直哉は、元良勇次郎「ヴァント心理概論」、上田敏「Modern English Pro」、夏目漱石「オセロ」「十八世紀文学」、大塚保治「美学概、美学」「美術史」、芳賀矢一「文学概論」、藤岡勝二「言語学」、福来友吉「実験心理学」、八杉貞利「ロシア語学」の履修を考えた。(『手帳4』補⑤P80)(『手帳5』補⑤P92)

\* 文学科(英吉利文学受験)の卒業には、「英吉利語学」・「英吉利文学」五、「言語学」一、「文学概論」一、「心理学」一、「美学」一、「哲学概論」一の必修科目の他、フランス語かドイツ語の一種と国語漢文の語学試験、卒業試験(論文試験、口述試験)の合格が必要だった。(『東京帝国大学一覽 明治三十九年～四十年』)

9・13(木)

木下利玄が直哉に葉書を書く。十四日の消印。時間割について更に研究しようと思つて正親町公和を誘ったが、やめた、新左団次でも伊井でも同行する、とのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。手紙の礼、祖母(玉浦)が十日に亡くなったことなど。(『武者小路実篤全集』)

柳宗悦が直哉に早速の返事を感謝し、岩倉重具の海軍兵学校合格を告げる絵葉書を書く。(『柳宗悦全集』)

9・14(金) 直哉は明治座(故市川左団次三回忌追善興行、『続々歌舞伎年代記』坤の巻)で観劇。そこで耳にした会話と、なきなめに

ついて手帳に記す。(『手帳4』補⑤P81)↓後の未定稿69『せめふさげ』(十三)

9・15(土) 直哉は、左団次のことを書いた葉書を有島生馬に送つたらしい。(M39・10・20志賀直哉宛有島生馬書簡)

9・18(火) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。麻布十月三十一日の消印。十三日にナポリで有島武郎と合流したとのこと。(『志賀

直哉宛書簡集』)

この頃からか？

大学付近の武者小路実篤の知人(真鍋、M40・3・6、4・24日記)の家を借りて、武者小路実篤が直哉にドイツ語を教え、直哉が武者小路実篤に英語を教えた。後には、武者小路実篤の自宅に場所を移して木下利玄も参加。マーク・トウェーン、ゴリキー、モーパッサンなどをテキストにした。(『武者小路実篤全集』年譜)(武者小路実篤『或る男』百四)

9・27(木) 正親町公和が直哉に絵葉書を書く。二十八日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

9・30(日) 直哉は、内村鑑三の話を聞いて、内容を手帳に記す。途中で見かけた草刈男について手帳に記す。(『手帳4』補⑤P83

↓84)↓後の未定稿69『せめふさげ』(十二)

10・3(水) 直哉は、洋行したいと手帳に記す。(『手帳4』補⑤P84)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローマの消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

10・9(火) 直哉は夏目漱石の授業で、小説は美を対象とするので読後感が悪いのはよくなつ、"Othello"は読後感が悪いという

話を聞く。(『手帳4』補⑤P85〜86)

10・11(木) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ティボリ十二日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

10・13(土) 東京帝国大学の入学宣誓式。(『芳舟遺稿』所収川村弘日記)

直哉は、手帳に、《恋ハチャンステアル、チャンスヲ避ケテ居ル聖人ハ仕舞ヒマデ恋ハ出来ヌ、希伯来書ニ淫ヲ避ケ  
 ヨトアルガ、此教ヲ堅ク守ツテ居ル人ハ、見惚レノ思ヒ出ノミヲ多クスルカモ知レヌガ神聖ニモ汚レタニモ、一生恋  
 ト云フ」ノ出来ヌ男ナリ、而シテカウ云フ男ニカギツテ神聖ナ恋ヲ夢ミテ居ルモノダ。一体其男トハ誰?》と記す。  
 (手帳4)補⑤P88)

10・16(火)

直哉は「手帳5」(Impressions III)を使い始める。読者を主人公としたDu Romanを考える。二ヶ月の旅を終えて  
 ローマに戻ったという有島生馬からの手紙が届く。(新『志賀直哉全集』補⑤P92)

10・17(水)

直哉は、黒木三次・木下利玄・細川護立と歌舞伎座で観劇。「川中島東都錦絵」「双蝶々曲輪日記」(引窓)「田舎源  
 氏」(古寺)「心中天網島」(河庄)「勢獅子」。雁治郎など。「引窓」は前日も見た。(手帳5)補⑤P93~94(『続々歌舞伎  
 年代記』坤の巻)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ローマ十八日、麻布十一月二十八日の消印。(志賀直哉宛書簡集)

10・19(金)

直哉は、月に三十円、年に三百六十円貰う小遣いの内、二百円か三百円を三年ため、さらに父・志賀直温から援助を  
 貰って計二千元ほどで洋行する事を考える。(手帳5)補⑤P96~97)

10・20(土)

直哉は朝重の「近頃河原達引」堀川の段を聞く。朝重を道徳律の窮屈なものを嫌う自由人だと思う。(手帳5)補⑤P  
 97~98)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。有島武郎がバチカンに法王への謁見を断りに行って帰ってきた、明日ローマを去る  
 など。(志賀直哉宛書簡)

10・21(日)

晩、直哉は、来宅した里見弴に『真三きさ子』を読んで聞かせ、文体が理屈臭いと感ずる。一月ほどだが、夏目漱石  
 の講義を聞いて、文章などにも陳腐なことがあると妙に気になってきたのは、ありがたいと思う。昨日読んだト  
 ウエーンの話落語に作ってみようかと思う。(手帳5)補⑤P98~99)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。アッシジ二十二日、麻布十一月二十七日の消印。〔志賀直哉宛書簡集〕

10・22(月) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。アッシジの消印、麻布十一月二十七日の消印。聖フランシスコ寺院に行ったこと。

〔志賀直哉宛書簡集〕

10・23(火) 直哉は夏日漱石のシェークスピアについての講義を聞き、手帳に記す。〔手帳5〕補⑤P99)

10・24(水) 武者小路実篤が直哉に手紙を書く。正親町公和が、直哉と武者小路実篤がやっている語学の交換教授の勉強会の英語の部に加わりたと言っている、ドイツ語を先にして一時半か二時に来て貰うようにすればいい、とのこと。このころ志賀家は、病氣(志賀隆子の赤痢、M39・11・21有島生馬宛書簡)で五日間の外出禁止。〔武者小路実篤宛書簡〕

10・25(木) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。フィレンツェの消印、麻布十一月三十日の消印。〔志賀直哉宛書簡集〕

10・28(日) 直哉は、大学は考えものだ、学士の肩書きを使つて中学校の先生をする気があるから迷つてるんじゃないか、規則づくめで束縛される教師はいやだ、卒業向きの嫌な勉強をしないと卒業は出来ない、大学は徴兵避け以上の意味を持たない、夏日漱石の講義だけは聞きたい、などと手帳に記す。〔手帳5〕補⑤P99〜102〕↓『大津順吉』の中等教員志望

この頃か? 稲・プリンクリーから、水曜日の会に電話で誘われ、直哉は「たいがい出ます」と返事をする。〔大津順吉』第一

三)〔草稿『第三篇』四)

10・30(火) 直哉は、稲・プリンクリーと同じ程度に愛している他の女に会いに行く事で、両方の愛を滅殺する事を考える。〔手帳5〕補⑤P102〜103)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ヴェネツィア三十一日、麻布十二月八日の消印。〔志賀直哉宛書簡集〕

10・31(水) 直哉は朝から気分が悪いが、大学に行き、夜、稲・プリンクリーのところに行く。ダンスはしないからと嘘をついて招かれ、実際にはダンスがあつたので不快な思いをする。稲は六月から神経衰弱にかかり、著しく痩せ衰え、以前のような傲慢な女ではなくなつたと思う。〔手帳5〕補⑤P103〜105)〔大津順吉』第一一四)〔草稿『第三篇』五)

11・1(木) 直哉は朝から体調が悪い。直哉は、類似赤痢にかかっており、隣の部屋に泊まり込んだ志賀留女の看護をもっぱら受けることとなる。留女の匂いをかぎ、抱かれて寝ていた幼年時代を思い出す。(M 39・11・21有島生馬宛書簡)(M 40・7・8有島生馬宛書簡)(『大津順吉』第一五、六)(草稿『第三篇』六、七)

正親町公和が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

11・2(金) 午後六時から内村鑑三の家で教友会の相談会。直哉は出席予定だった。(手帳5)補⑤P102

この頃か?

直哉は、既成作品として、『雪雄』(↓未定稿3)・『悪魔凱歌』(↓未定稿19)・『おきさと真三』(↓未定稿22)、未完成・腹案中として、『富貴色悪魔誘惑』・『小楽者の死』・『谷の水車』(↓後の未定稿23、24、39)・『お竹と利次郎』(↓未定稿

14)・『お葛と富次』(↓後の未定稿10、11、65、66)・『富と家庭』・『天心』、小品未完成として、『死猿』(↓未定稿9)・『舞踏会』・『万霊塔』、その他『脱営』『牧と朝重』などの作品名を手帳に記す。(手帳5)補⑤P105~106)

11・5(月) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ミラノ五日、麻布十二月八日の消印。六枚続きの絵葉書も書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

集)

11・6(火) 直哉は、なんでもうんと強く、自由な、思い切って怒る事の出来る、思い切って笑う事の出来る、思い切って泣く事の出来る、まじりつ気なしに何でも出来る人間にならねばならぬ、と手帳に記す。(手帳5)補⑤P106)

正親町公和が直哉に見舞いの絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

11・8(木) 夜、直哉は寢床で義太夫をさらう。(手帳5)補⑤P106~107)

木下利玄が直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。少しはいいという話だが、もっとよくなったかとのこと。(『武者小路実篤全集』)

11・10(土) 服部他之助の家で、岩倉具重の送別会。直哉も出席予定だった。(手帳5)補⑤P102)

この頃か? 直哉は写真撮影。(『新潮日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・写真)(筑摩書房『日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・写真)

11・13(火) 有島武郎・有島生馬・岩下家一が、スイスから直哉へ寄せ書きの絵葉書を書く。(『有島武郎全集』)

11・16(金) 武者小路実篤が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡』)(『武者小路実篤全集』)

この頃か? 直哉は病気がぶり返し、激しく血を下す。(『大津順吉』第一一七)(草稿『第三篇』八)

11・19(月) 有島生馬が直哉に、有島武郎やマテイルダ・ヘックらと寄せ書きの絵葉書を書く。シャフハウゼン二十日の消印。  
(『志賀直哉宛書簡集』)

11・21(水) 直哉は、有島生馬に手紙を書く。夏目漱石の授業は、「英国十八世紀文学」と「Merchant of Venice」とで週に六時間あり、最も面白い。他に取っているのは、上田敏の講義、芳賀矢一「文学概論」、大塚保治「美学」、藤岡勝二「言語学」、元良勇次郎「心理学」だが、すべて下らない、よく休むが、学課の修了証だけは貰おうかと人のノートを借りて写している、文学士になっても仕方ない、乱暴したため類似赤痢が三四日前からぶり返したが、今はどうともないなど。(M39・11・21有島生馬宛書簡)

木下利玄が直哉に葉書を書く。市村座を見た、明日お目にかかる、そのうち若竹亭へもお伴すること。(『志賀直哉宛書簡集』)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。全快するまでは乱暴するのをやめて身体を治すことに力をつくすようにとのこと。

(『武者小路実篤全集』)

11・23(金) 直哉は、尾崎紅葉訳『クロイツェル・ソナタ』を読む。(『手帳5』補⑤P107)

久し振りに大学に行き、西洋料理店で昼食。誘惑的な女の店員がいる。(草稿『第三篇』八)

落語家を、滑稽を主にしたものと滑稽に一種の皮肉を加味したものと二種にわけ、後者に属するものとして、小ざん・馬楽・円藏を挙げ、評価する。(『手帳5』補⑤P107~108)

組幸の「本朝廿四孝」四段目(十種香)を聞いての感想を手帳に記す。(『手帳5』補⑤P108~109)↓後の未定稿69「せめ

## ふさげ』(六)

11・24(土) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ミュンヘンの消印、東京四十年一月一日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

11・25(日) 直哉は内村鑑三の話を聞き、手帳に記す。(『手帳5』補⑤P109~110)

木下利玄の応接間で待たされた時の不快を手帳に記す。(『手帳5』補⑤P110) ↓後の未定稿69『せめふさげ』(五)

11・26(月) 直哉は、四時~六時までの「文学概論」までには大分時間があるので、市村座に行く途中、三年ぶりくらいで岩元禎

に会い、翌日行くことを約束。今後もちよいちよい行くつもり。市村座の「増補桃山譚」、宮戸座「佐倉義民伝」を見る。「文学概論」は休み、家で「言語学」のノートを写す。(『手帳5』補⑤P111~112)(M39・12・12有島生馬宛書簡)

(『続々歌舞伎年代記』坤の巻)

11・28(水) 直哉は木下利玄と若竹亭に義太夫を聞きに行く。大吉の「菅原伝授手習鑑」四段目、末勝の「日蓮聖人御法海」三段

目(勘作住家)、播の助の「碁太平記白石噺」、朝重の「三十三間堂棟由来」(柳)、素行の「恋飛脚大和往来」(新口村)を聞く。(『手帳5』補⑤P114~115)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ニュルンベルク二十九日の消印、東京四十年一月一日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

11・30(金) 有島武郎・有島生馬が、直哉へ寄せ書きの絵葉書を書く。(『有島武郎全集』)

この頃か? 直哉はフォスの「Goethe und Schiller in Brien」を読もうとする。(『手帳5』補⑤P112~113)

12・? 細川護立・正親町公和・木下利玄らの晩会が回覧雑誌「曉泉」を発行。『聯珠吟』に直哉も加わっている。もともと  
は二月二十三日から五日間、学習院で行われたものを細川護立が書き綴ったもの。(紅野敏郎『木下利玄論(上)』S

55・10「文学」)

12・1(土) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ドレスデンの消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・2(日) 直哉は内村鑑三の話を聞き、手帳に記す。(『手帳5』補⑤P114)



「御隣りの赤が来て食べますよ」と威して子供を泣き止ませる母親への非難を手帳に書く。(「手帳5」補⑤P15～16)  
小便に宿る月について手帳に書く。(「手帳5」補⑤P16) ↓後の未定稿69『せめふさげ』(七)

木下利玄が直哉に絵葉書を書く。夏目漱石は、小さんの落語は好き、昇之助の義太夫は嫌いだそうだ、岡山孤児院の芝居に行こうか、など。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・4(火) 直哉は志賀隆子の嫁入りについて手帳に記す。(「手帳5」補⑤P17) ↓後の未定稿69『せめふさげ』(四)

12・6(木) 直哉は葺屋町大ろじで小さんの落語を聞く。前日、三日前も行った。(「手帳5」補⑤P17～18)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ベルリン七日の消印、麻布の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・7(金) 直哉は、武者小路実篤と共に箱根へ旅行。十時、新橋発。国府津で松平茂時、酒匂川で林三郎に会う。橋本屋泊。

(「手帳5」補⑤P18～19)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ワイマール十三日の消印、麻布四十年一月十六日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・8(土) 直哉と武者小路実篤、九時に元箱根を出発、笹原のさくらやの張り紙を手帳に写す。修善寺・浅羽館泊。(「手帳5」

補⑤P19) ↓後の未定稿69『せめふさげ』(三)

武者小路実篤と連名で、元箱根・橋本屋の庭と湖の絵葉書を木下利玄へ出す。(紅野敏郎『木下利玄宛絵葉書』S58・4

「短歌」)

12・9(日) 直哉と武者小路実篤、八時に出発、伊東・暖香園泊。山田寅之助の旅行談を読む。(「手帳5」補⑤P19)

木下利玄が直哉に手紙を書く。昇之助というと明治三十七年頃の切り下げ髪の姿を連想する、君はついこの間組幸らの義太夫は第三者として語るが、昇之助はその人となって語るので両方よいと言っていた、歌舞伎座に行くなら一緒に行くこう、など。(『志賀直哉宛書簡』)

12・10(月) 直哉と武者小路実篤、六時に出発。熱海、真鶴沖を国府津まで船で通って帰京。晩、大ろじで、小さん・田左・田蔵

の落語を聞く。その後、組幸の「恋飛脚大和往来」(新口村)を聞く。(「手帳5」補⑤P19~20)↓後の未定稿69『せめふさげ』(二)

有島生馬宛ての旅行の感想に《自分は近頃理屈のための理屈、不平のための不平。気六ヶしい顔をしてるための気六ヶしい顔が嫌いになつた》、《大変自由になつた感がある》と書く。(「手帳5」補⑤P118)

12・11(火)

直哉は、黒木を初めとして、友達・家族・自分・岩元などの性格を研究して、雄篇を作ろうと考える。(「手帳5」補

⑤P121~122)

12・12(水)

直哉は手帳に『万霊塔』に関するメモをする。《○理屈ぬきで深刻がらぬやう、何んとなく気楽で、馬楽の落語の心持ちでなければならぬ、／○何事も云つた事を解釈せぬ事、要するに主観的文句はぬかねばならぬ、／○本筋に閑せぬ私事は出来るだけ避けた方よし、／○場所も明指せず人物の容貌なども性格だけ書いて、読者に想像させる事、／○総て心持(感じ)を主とする事、》などと記す。馬楽に漱石の『坊ちゃん』、鏡花の『通夜物語』『三枚続』を読ませたいと考える。円蔵・馬楽・小さんの一つにして、世の中の偽善を片っ端から罵らせたら愉快だと思ふ。床屋で聞いた会話を手帳に記す。(「手帳5」補⑤P122~124)↓後の未定稿69『せめふさげ』(二)

直哉は、有島生馬に手紙を書く。武者小路実篤とした旅行のこと、十一月二十六日のこと、十月三十一日のことなど。(M39・12・12有島生馬宛書簡) 半谷重固に手紙を書く。二週間ほど前、半谷重弘から手紙を貰った、もうじき祖父・志賀直道の一周年なので、ゆっくり遊びにおいて下さい、など。(M39・12・12半谷重固宛書簡)

12・13(木)

直哉は風邪だが、歌舞伎座見物。岡山孤児院慈善芝居だった。「だんまり市原野」「菅原伝授手習鑑」を見る。芝翫、八百蔵、羽左衛門など。頭痛で後は見残して帰宅。(「手帳6」補⑤P129)《続々歌舞伎年代記》坤(巻)

12・14(金)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ワイマールの消印、麻布四十年一月十六日の消印。(「志賀直哉宛書簡集」)

12・?

有島生馬が直哉に自筆絵葉書を書く。(「志賀直哉宛書簡集」)

- 12・15(土) 直哉は鏡花の『愛火』を読む。近頃はこんなのが少し嫌になる。田中平一から“Current Literature”を送ってくる。  
〔手帳5〕補⑤P128)
- 12・16(日) 直哉は、「手帳6」(Impressions K)を使い始める。「菅原伝授手習鑑」を読む。宮松亭に行く。京の助の「恋娘昔八丈」鈴ヶ森の段・小土佐の「伽羅先代萩」六段目(御殿)・東照の「艶容女舞衣」酒屋の段・東糸の「五斗兵衛」・朝重の「壺坂靈驗記」を聞く。(新『志賀直哉全集』補⑤P128)
- 12・17(月) 直哉は宮戸座の落語家芝居を見るが、なっていないと思う。帰途、はじめて浅草の市を見る。(「手帳6」補⑤P132)
- 直哉は、木下利玄に絵葉書を書く。勉強は風邪を引いて以来やめている、鏡花の新しい小説を読んだ、朝重の「壺坂靈驗記」下手、落語家の芝居も馬鹿けていた、など。(M39・12・17木下利玄宛書簡)
- 12・? 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。(「志賀直哉宛書簡集」)
- 12・18(火) 直哉は三十九度近い高熱で苦しむ。(「手帳6」補⑤P132)
- 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。(「志賀直哉宛書簡集」)
- 12・19(水) 直哉は徳富蘆花の『巡礼紀行』を読む。(「手帳6」補⑤P132)
- 12・20(木) 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。二十一日の消印。学校は土曜日までである、元良勇次郎が、色を出して連想するものを書けと言った、など。(「志賀直哉宛書簡集」)
- 12・21(金) 直哉は三十日まで日本語の本を読まず、英語・ドイツ語の本を読むことを誓う。(「手帳6」補⑤P132)
- 12・22(土) 直哉は、手帳に『尊敬の伴はざる恋は、恋人をケガシ、己れも亦ケガサル。』と記す。コーリキの“In the Steppe”  
“26 Men and a Girl” “An Autumn Night” “Green Kitten”を読む。“26 Men and a Girl”は昇之助との関係に似ていると思う。夜、武者小路実篤と話す。(「手帳6」補⑤P134)
- \*『興津』・『蝕まれた友情』(一)にも『二十六人と一人』についての言及がある。

12・23(日) 直哉は、武者小路実篤に借りた二葉亭四迷訳・ツルゲーネフの『あひゞき』を読んで感心。(「手帳6」補⑤P134)

\*ツルゲーネフは、二葉亭四迷訳で『初恋』を読んだのが最初。(『稲村雑談』「読書」)

12・24(月) 直哉は手帳に、『○We wanted something to love, we had found what we wanted, and we loved it. Gorki.』と記す。

(「手帳6」補⑤P134)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。葉書の礼、明日三浦に行く、来年岩元禎に紹介して貰おうとのこと。(『武者小路実篤全集』)

12・25(火) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。麻布四十年一月二十四日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

この年の暮か? 前年の暮か?

直哉は、稲・プリンクラーからクリスマス・カードを貰い、わざわざ丸善までクリスマス・カードを買いに出掛けて送る。(『大津順吉』第一―三)(草稿『第三篇』四)

12・26(水) 晩、直哉は角筈の内村鑑三のクリスマス会に出席。(「手帳6」補⑤P135―137)

12・28(金) 直哉は、小土佐の「艶谷女舞衣」酒屋の段・東吉の「百度平」・東糸の「恋飛脚大和往来」(新口村)・朝重の「本朝廿四孝」四段目(十種香)を聞く。朝重を妻にすることを考え、嘗て恋したM女を思い、小説を構想。(「手帳6」補⑤P138―140)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ブリュッセルの消印、麻布四十年二月七日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

金田から武者小路実篤が直哉に葉書を書く。「学習院輔仁会雑誌」に出す『修養の根本要件』という論文を書いた、など。(『志賀直哉宛書簡』)(『武者小路実篤全集』)

12・29(土) この頃から、直哉はツルゲーネフの『Rudin』(『ルージン』)を読む。(「手帳6」補⑤P140―141)

正親町公和が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡』)

木下利玄が直哉に葉書を書く。三十日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

伊豆山の川村弘が東京の直哉に手紙を出す。(『芳舟遺稿』所収川村弘書簡)

12・30(日) 直哉は内村鑑三の話聞き、手帳に記す。(「手帳6」補⑤P142)

この年 志賀直方が分家。(志賀家系図)

?・? 里見弾が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)